



知恵の樹

No. 276 ● 2023年7月10日

町田の図書館活動をすすめる会

<https://machida-library.jimdofree.com/>

代表：手嶋 孝典

susumerukai1984@gmail.com

特集 コロナ後の「新しい生活」と図書館

図書館のレファレンス・サービスを使いこなそう！

石井 一郎（元町田市立図書館員）

レファレンスサービスは図書館で大事なサービスの1つです。図書館は利用者の学習・調査・研究などの手助けとして、図書館資料や情報を提供します。利用者の質問は、料理の作り方などの日常的な質問から専門的な質問まで多様です。具体的にどんな質問に答えているのか、私が勤務していた町田市立金森図書館の事例を紹介します。

Q1「大名屋敷の門の写真が見たいです」

このご質問は、模型を作るのに参考としたいという利用者の方からいただきました。大名屋敷の門として思い浮かぶのは、東大の赤門でしょうか。現存するものは少ないので、昔の写真なども想定して探します。キーワードは「大名屋敷」「門」「江戸時代」「日本建築」「写真」「浮世絵」です。ご質問をいただいた時には、資料検索で見つけた『カラー版 地図と愉しむ東京歴史散歩 お屋敷のすべて篇』（竹内正浩著、中公新書）をお渡ししました。

その後、他館から取り寄せた『レンズが撮らえた幕末日本の事件史』（日本カメラ博物館監修、山川出版社）で、明治期の写真と絵を確認してお渡ししました。写真は日本カメラ博物館所蔵のもので、4か所的大名屋敷が載っています。絵は浮世絵が1枚と、『徳川盛世録』（市岡正一著、平凡社）の5万石以上の大名屋敷の表門の絵3枚があります。質問された方にお見せしたら、喜んで借りていかれました。

Q2「バス等の指差し安全確認に関する本はありませんか」

こちらのお問い合わせに対応した同僚は、金森図書館で適当な本を見つけられず、中央図書館のレファレンス担当へ調査を依頼しました。中央図書館の担当者より『危険予知活動トレーナー必携新版』（中央労働災害防止協会著・出版）に「指差呼称（しさこしょう）」の記述があることと、照会先として交通博物館・バス会社の情報をもらい、質問者に回答しました。

私も個人的にインターネットを使って調査しました。「指差呼称」で検索すると本が見つかり、「指差呼称」は元々、国鉄が始めたこともわかりました。厚生労働省のホームページでは、安全衛生のキーワードとしての「指差呼称」から手順と図にたどり着けました。鉄道の本を探すと『テツ語辞典』（栗原景文、池田邦彦絵、誠文堂新光社）の見出し語として「指差喚呼」があり、『鉄道文字の世界』（中西あきこ著、天夢人）にはJR九州の大畑駅のホーム下の階段にあった「指差呼唱」の文字についての解説がありました。

2つの事例を紹介しましたが、いかがでしょうか。いま皆さんはコロナ禍で図書館への来館を控えたり、職員へ声掛けするのをためらわれたりされているかもしれません。コロナが落ち着きましたら、本の探しかたなどでわからないことなどを、職員にお気軽に声をおかけください。

多摩地域の図書館比較——貸出密度編

山口 洋（町田の図書館活動をすすめる会会員）

図書館の活動については、各種統計データから比較分析できます。例えば東京都内の公立図書館については、都立図書館の提供する「東京都公立図書館調査」にて2016年度から2022年度までの統計データをインターネット経由で閲覧できます。これを元に7年間の変化を比較してみました。

今回は貸出密度です。貸出密度とは、各図書館の一定期間内における貸出資料数をそのサービス人口で割る方法で、その図書館の活動を「貸出」に主眼を置いて分析する方法です。日本図書館協会では、貸出密度の高い上位10%の図書館について、人口別に図書館活動の各種平均値を公表しており、図書館活動の目安に使われる数値です。

本稿では多摩地域の市立図書館に限定し、2016年度と2022年度の貸出密度ランキングと兩年との比較を掲示しました（表1）。2020年度には新型コロナウイルス感染症による臨時休館もあり、利用は軒並み減少しました。但し、2021年度以降は各館とも利用者回復の兆しが見られます。

1位の武蔵野市、2位の稲城市、また上位の調布市、多摩市ともに減少はみられても小幅であり、比較的高い貸出密度を示しており、ランキングでは上位に位置しています。それに対し町田市の場合は、2016年度は貸出密度10.03であったのに対して、2022年度は7.4へと大きな減少が見られず（表2も参照）。

日本図書館協会の公表する「貸出密度上位の公立図書館整備状況・2019」によれば、人口30万人以上の公立図書館における貸出密度上位10%の図書館における貸出密度平均値は8.65であり、町田市は年度こそ違えどもその平均以下になってしまったのです。

上位の図書館と他の図書館とは何が違うのでしょうか。皆さんはどの様に考えますか？

〈表1〉多摩地域の図書館：貸出密度ランキング

2016年度	貸出密度	2022年度	貸出密度
武蔵野市	17.04	武蔵野市	16.22
稲城市	14.01	稲城市	12.09
調布市	11.84	三鷹市	10.51
多摩市	11.6	調布市	10.19
西東京市	11.44	多摩市	10
福生市	11.15	福生市	8.49
町田市	10.03	西東京市	8.14
立川市	9.31	小金井市	7.97
日野市	9.06	立川市	7.96
府中市	9.01	日野市	7.9
東大和市	8.63	町田市	7.4
あきる野市	8.57	府中市	7.3
小平市	8.34	小平市	6.92
三鷹市	8.11	あきる野市	6.88
国分寺市	7.96	東村山市	6.81
小金井市	7.95	東大和市	6.61
清瀬市	7.91	東久留米市	6.44
東久留米市	7.67	国分寺市	6.27
東村山市	7.36	昭島市	6.23
青梅市	6.8	清瀬市	6.2
狛江市	6.49	狛江市	6.01
国立市	6.09	国立市	5.94
羽村市	6.03	青梅市	5.5
昭島市	5.82	羽村市	4.72
武蔵村山市	4.82	八王子市	3.88
八王子市	4.81	武蔵村山市	3.82

〈表2〉貸出密度の増減比較

2016-2022			
西東京市	-3.3	羽村市	-1.31
福生市	-2.66	青梅市	-1.3
町田市	-2.63	東久留米市	-1.23
東大和市	-2.02	日野市	-1.16
稲城市	-1.92	武蔵村山市	-1
府中市	-1.71	八王子市	-0.93
清瀬市	-1.71	武蔵野市	-0.82
あきる野市	-1.69	東村山市	-0.55
国分寺市	-1.69	狛江市	-0.48
調布市	-1.65	国立市	-0.15
多摩市	-1.6	小金井市	0.02
小平市	-1.42	昭島市	0.41
立川市	-1.35	三鷹市	2.4

図書館を楽しもう——図書館 120%活用法

園田 碩哉 (NPO 法人役員)

身近に図書館があることは知っていても、実のところあんまり行ったことがなかった。現役時代は多忙だったせいもある。それでも急に資料が必要になって、自分の本棚の本では間に合わず、図書館に駆け込んで助けられたこともあった。リタイアしてからは、近所の図書館を散歩コースに組み入れて立ち寄ることが多くなった。寒い冬の日には暖を求めて、あるいは猛暑の夏はひんやりした空気に触れるために図書館へ行くことも少なくな。家の暖房やクーラーを点けっぱなしにするよりは、図書館の快適空間で避暑・避寒を決め込む方が身体にも財布にもいいことだ。自宅と行きつけの喫茶店、たまに行く一杯飲み屋と共に、図書館は私の大事な居場所である。

わが図書館体験を振り返って、その上手な利用法をまとめると次の4項目に集約できそう。

① **新聞・雑誌を読む**……家で取っている新聞は1紙、多くて2紙までだろう（最近新聞を取らない人も多いという）。雑誌も週刊誌から文芸誌までいろいろあって、あれもこれも買うわけにはいかない。その点図書館に行けば何でもある。新聞雑誌の拾い読みだけで半日は潰せる。

② **話題の本を探す**……新聞には書評欄があって、面白そうな本が毎週紹介される。本屋に行って立ち読みするのも手だが、じっくり読んでみたい本もある。そこでスマホの検索で図書館の本を検索するとちゃんとある。予約して取りに行けば2週間は借りられる（ただしベストセラーはあっても待たされる）。

③ **テーマを掘り下げる**……時として「あれはどうなっている？」と調べたいことが出てくる。庭でつくれそうな野菜には何があるかというような身近なことから、ロシアとウクライナの問題と

か、NHK大河ドラマの家康の一生とか。そんな時、関連する本が見事に整理されて並んでいる図書館はありがたい。

④ **ブラウジングの楽しみ**……ブラウジングとは「閲覧」ということだが、書棚の間をぶらぶら歩いて、すてきな本に出会うこと——何の目的もなく本の背表紙を見ているだけなのだが、これが何とも言えず楽しい。やっぱり、ブラウジングこそ図書館歩きの原点だと思う。

それにしても町田の図書館、このごろ話題の本がなかなか見つからない。聞いてみたら予算の削減で、新刊書の購入が以前に比べて大幅に減っているらしい。これはイケマセンよ。市民の精神生活のベースである図書館に資金を投入するのは市の大事なお役目のはず。資料費をけちるな！

町田市立図書館の資料購入費は東京都内で最低額です！

市議会への請願署名にご協力ください

ご存じですか？ 今年度の町田市立図書館の市民一人当たりの資料購入費は、東京23区・多摩26市を合わせた全49自治体の中で最低、それも平均の3分の1強という悲惨な状況です。これでは市民は満足な図書館サービスを受けられません。

そこで当会では、資料購入費の増額を求める請願を9月の定例市議会に提出することにしました。この請願が全会一致で採択されるよう、一人でも多くの皆様からご署名をいただければ嬉しいです。

署名簿は、当会のホームページの「ニュース」のサイトからダウンロードできます。お手数をおかけしますが、2023年8月20日までに署名簿の下にある住所までお送りください。よろしく願い致します。

移動図書館で広がる未来の可能性

清水 陽子（元町田市立図書館協議会副委員長）

移動図書館っていったい何？ 最近見ないけどまだ走っているの？ 使ったことはないけど知っている等々、移動図書館については、いろいろな認識の方がいらっしゃると思います。実は町田市では3台の移動図書館車「そよかぜ号」が、細長い市内を走り回っています。移動図書館は、建物の図書館から離れた地域に住んでいる市民のために、図書館を出前するというものです。町田市は今後建物の図書館を増やさないどころか減らす方針が打ち出されているため、移動図書館にはまだまだ頑張ってもらう必要があります。

町田市の移動図書館車は、イベントに参加するとき以外、平日の昼間のみでの運行なので、利用できる人は限られてしまいますが、利用されている方は建物の図書館まで出かけるのが大変な方も多く、図書館が近くに来てくれることはとても意味のある事です。予約した本を受け取ることもできますしね。

でも、それだけではもったいない！

せっかく近所の公園などに、本を携えて司書さんと図書館が来てくれるのです。もっと移動図書館とできることを考えるのもいいなあと考えています。ミニお話し会、その時だけの野外ティータイム、晴れの日限定の読書会……そんなこともできるかもしれません。すでに「そよかぜ号」の第1巡回日に合わせて、子どもたちは外遊び、親

はおしゃべりの「子育てサロン」（社協が支援）をしているところもあるそうです。

コロナ禍で外出は制限され、図書館の建物に入ることもできなかった時は、移動図書館が来てくれたらいいのに、と思った方も多かったはずで。こんなことができたはず、こうすれば安心・便利ということを持ち寄って、何があっても対応でき、いつもの暮らしが維持できるようにしておくことが大切だと実感したと思います。コロナ禍を経験した私たちは、当たり前と思っていたもののもろさを知ったのですから、自分事として考え、提案していくことが、次の一歩ではないでしょうか。

町田市立図書館のウェブサイトで「移動図書館」を「かんたん検索」すると、図書、雑誌、DVDを含めて41件がヒットします。絵本や図鑑から、報告、ミステリー小説まで様々です。小説の中の司書さんは謎解きまでしてしまいますが、町田市の移動図書館の司書さんたちも、巡回場所ごとの利用者さんの様子を覚えていて、「今日はあの場所だからこんな本を」と、持っていく本の選書にも気を配っているそうです。みなさんも移動図書館だったらできること、移動図書館とやってみたいことを考えて、新しい方法で移動図書館を使いこなしてみませんか。



Rio



『82 年生まれ、キム・ジヨン』

チョ・ナムジュ著、斎藤真理子訳

筑摩書房（ちくま文庫）2023 年

紹介者 ● そのひろこ（町田市民）

この本を読んで涙が出て止まりませんでした。

「身につまされる」というのは、こういうことを言うのではないのでしょうか。私はキム・ジヨンさんより 1 世代ほど年上になるのですが、私の生きてきた時代には、日本の女性たちもまさにこんな風だったと思います。男性が主人で女性はしもべというのは、有史以来変わることのない原理だと信じられてきました。男の子は台所に入るな（男子厨房に入らず）、女の子は食事や洗濯や掃除まで母親の手伝いをするのが当たり前でした。

それにしても韓国社会の男尊女卑は凄かったんですね。お嫁さんは男の子を生まないと肩身の狭い思いをさせられ、ジヨンさんの母親は女 2 人を生んで 3 人目も女と分かると、中絶しなくてはならなかった。やっと生まれた下の弟は一家の宝物のように扱われて、ご飯をよそ順序も父から始まって弟が先、お菓子にしても弟の食べた残りを年上の姉妹がいただくというのですから。

物語は小学校から中学、高校、大学へとジヨンさんの生い立ちをたどり、その母、オ・ミスクさんの苦難を描きます。母に励まされて就活に走り回った末に、やっとのことで広告代理店に就職、会社の人間関係に振り回されてやがて結婚、子どもができて仕事との両立に疲れて退職、しかし、専業の母親を寄生虫みたいに見る世間の目が耐え難い。拳句の果てに夫の実家に帰省した折、突然人格が自分の母親に転移して、思いのままに舅たちへの批判をぶちまけて周囲を凍り付かせる——実はこの場面が作品の最初の方に出てくるのですが、読んでいる私も胸のすく思いがしました。私もこんな風に一度言ってみたかった。

男権一辺倒だった韓国社会は、ジヨンさんの成長に合わせるように大きく変わっていきます。悪



名高い戸主制度は改正され、出自が同じ姓だと赤の他人なのに結婚できないなんていう、とんでもない民法も変わりました。職場でまかり通っていたセクハラ、パワハラにも、厳しい目が向けられるようになります。中年を迎えたジヨンさんも改めて自分のやりたいことを考えて勉強し、新たな職を見つけようという気になったようです。お話はそこで終わりますが、その 10 年先にジヨンさんがどうなったのか、韓国の社会はどう変化していくのか、ぜひこの続きを読みたくまりました。日本の社会にも全く同型の問題がわだかまっています。ぜひ男性の皆さんにも読んで感じ、考えてほしい本です。

こんな本もおすすめ！

- 1 『**私たちが記したもの**』（チョ・ナムジュ著、小山内園子・すんみ訳、筑摩書房、2023 年）『82 年生まれ、キム・ジヨン』の著者チョ・ナムジュの邦訳最新刊です。
- 2 『**アーモンド**』（ソン・ウォンビョン著、矢島暁子訳、祥伝社、2019 年）近年の韓国作家によるベストセラーの 1 冊です。2020 年「本屋大賞・翻訳部門」で第 1 位。
- 3 『**新・韓国現代史**』（文京洙著、岩波書店（岩波新書）、2015 年）戦後の韓国政治史と民主化運動の歴史を通観できます。キム・ジヨン世代を知るための好著。
- 4 『**スカートの風**』（呉善花著、角川書店（角川文庫）、1997 年）日本留学をした韓国人女性によるルポエッセイ。日韓論の古典的ベストセラーです。

「図書館革命」と町田市立図書館

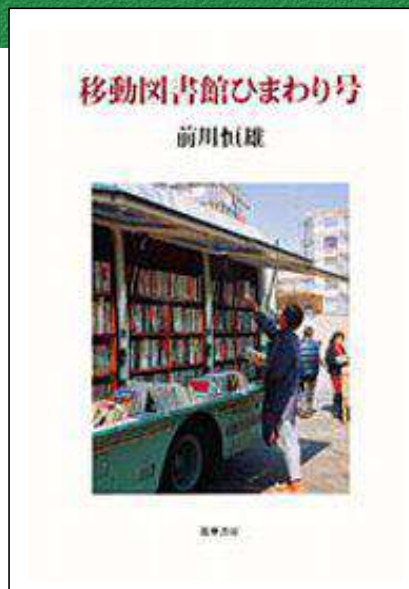
守谷 信二（元町田市立図書館長）

いま私たちは誰でも、図書館で好きな本を自由に書架から選んで借り出したり、図書館にない本はリクエストすれば、購入や他市の図書館からの借りで提供してもらうことができます。でも、こうしたごく当たり前の図書館サービスも、50年ほど前までは決して一般的なものではありませんでした。当時の図書館はまず本自体が少ないうえに利用も館内閲覧が中心で、ごく一部のもの好きな市民が調べものをしたり、学生が受験勉強をするところと考えられていました。

それが現在のようになったのは、1965（昭和40）年9月にスタートした移動図書館車1台による日野市立図書館の目覚ましい活動がきっかけです。

日野の活動をひと言でいえば、図書館は市民に利用されてこそ意味があるという考えのもとに、市民がもっとも必要とする「貸出」に重点を置いたサービスを徹底して行ったことです。その結果、当時としては驚異的な貸出実績を達成し、一躍全国の図書館の注目の的となりました。この日野市立図書館の活動が、多摩地域の他の図書館、とくに府中と町田の図書館をいち早く動かし、さらに全国津々浦々の図書館に波及することになります。

戦前から鶴川で私立南多摩農村図書館を運営し、長らく日本図書館協会の理事も務められた浪江^{なみえけん}虔さんは、この日野から始まった公立図書館の画期的な躍進を、のちに「図書館革命」と呼びました。日野市立図書館の誕生と活動の顛末については、初代館長だった前川恒雄さんの著書『移動図書館ひまわり号』（1988年 筑摩書房・2016年 夏葉社より再刊）をぜひお読みください。本書



の中で前川さんは次のように書かれています。

「日野の活動を見て、それにつづく仕事をまずしてくれたのは、東京の府中と町田の市立図書館だった。府中では、利用者の名前がブックカードに残る貸出方式を、日野と同じ残らない方式に改め、開架書架を増やして借りやすくした。町田では、それまでの建物がとりこわされることになって、米軍のかまぼこ兵舎のお古に移ったのを逆手にとって、閲覧室をなくし、それまでしていなかった貸出を始めた。館則に貸出しの規程がないのに、職員が勝手にやりだしたのである。（中略）／府中でも町田でも、館の方向が変わると利用が急上昇していった。市民に喜ばれ、職員は自信がつき、図書費も何倍かに増えていった。この二館が日野を例外にさせず、日野の方向の正しさを証明してくれた。私には実にありがたい援軍だった。」

これ以降1970年代を通じて、町田市立図書館は飛躍的な発展を遂げますが、実はその背景には日野市立図書館の存在とは別に、町田ならではの市民による力強い運動がありました。（次号に続く）

ウクライナを考える視点

高橋 門樹（教育家）

砲声が鳴り響き、崩落した建物の傍らで人々が途方に暮れる。メディアで映し出されるこうしたウクライナの戦争は、すでに1年半近くも継続している。AIが人知を超えて社会システムを動かしつつあるこの時代に、現実世界で起きていることはあまりにもアナクロニズムである。ロシアによるウクライナ侵攻については、すでにメディアが様々な情報を提供している。しかし、本稿では日本で普段目にする情報とは少し異なる視点から、ウクライナを知る書籍を紹介したい。

ひとつは宗教である。日本でキリスト教というと、カトリックとプロテスタントの2つの宗派を思い浮かべるが、ロシア・東ヨーロッパに広がる東方正教会を外してキリスト教を語ることはできない。その東方正教会の中でもロシア正教とウクライナ正教の間では確執があり、それがこのウクライナ侵攻にも大きな影を落としている。それを詳らかに著わしているのが、『**ウクライナ侵攻とロシア正教会——この攻防は宗教対立でもある**』（角茂樹著、河出書房新社、2022年）だ。

著者は元外交官であり、2014～19年に駐ウクライナ特命全権大使を務めた。本書では、2014年のロシアによるクリミア併合以後、ウクライナ国内で「修道院の中にはロシアのスパイの巣窟となっているところがある」との疑念が生まれ、ウクライナ正教会のモスクワからの分離独立運動が興ったこと、そして2019年に同教会の独立が成ると、翌年ウクライナを訪問したポンペオ米国務長官が祝意を表明したことなどが紹介されている。こんなところにも米口の角逐が垣間見える。著者は、宗教改革も啓蒙思想も経験していない内向きなロシア正教と、それらを経験済みのウクライナ正教の異同を洞察し、ロシア正教会がロシアの民族主義と思想の支柱になっていると指摘する。

さて、ウクライナ侵攻後、一千万人を超える避難民がウクライナの国内外にあふれている。2023年6月30日付の法務省出入国在留管理庁の資料に

よれば、2022年3月以来、日本が受け入れたウクライナ避難民は2,460人にのぼる。原則的に男性はウクライナ国内に留まることが義務付けられているため、避難民のほとんどが女性である。彼女らはどのような経緯で日本まで辿り着き、いかなる支援を受けて生活しているのだろうか。その一端を伝えてくれるのが『**ウクライナから来た少女ズラータ、16歳の日記**』（ズラータ・イヴァシコワ著、世界文化社、2022年）である。

著者は2005年生まれのウクライナ出身の少女だ。美術の専門学校生徒で、13歳の時に親戚の家で見つけた日本語教本に出会って以来、日本語を独学で勉強してきた。「いつか日本に行って、日本語を自由に使えるプロの漫画家になれたらどんなにいいかしら」と夢想していた。2022年2月24日に彼女の家の近くでロシア軍による爆撃が起きてから、彼女の命運が急展開した。彼女の母は日本に憧れを持つ娘を、何としても日本に避難させようと決めた。自由のなかったソ連時代のウクライナで幼少期を過ごした母が、娘には自分の好きなことを実現させてやりたいと願う親心が動機だ。娘のズラータが1人で出国した経緯と、日本での生活を克明に日記形式で綴ったのが本書だ。

今年5月に広島で開催されたG7サミットに、ウクライナのゼレンスキー大統領が来日して参加した。岸田首相はサミットで「必要とされる限りウクライナを支援する」と宣言するコミニケの採択を主導した。しかし、それが軍事支援まで含むことに留意しなければいけない。戦時下、政府のプロパガンダ的情報に翻弄されることを避けるためにも、われわれ市民はウクライナについて知る努力をし、複眼的な視点を持つことが必要であろう。町田市市内にもウクライナから避難して来た家族が住んでおり、彼女らと直接交流、支援をしているロシア出身の人を私は知っている。政治的な理由から人々にまで単純な正邪の色付けをしてはいけない。



—— 活動報告 ——

【町田市図書館協議会定例会報告】

5月12日14時から町田市立図書館中集会室で第10回定例会が行われました。

協議会では、「移動図書館」の充実を願い、18期第5回(2020年7月)から19期いっぱいにかけて、①魅力を高めるための方策、出張運行と体験学習、②サービス拠点のあり方、③移動図書館のサイズ、④将来的なサービス拠点について審議を続け、19期の最後にあたり、そのまとめを協議会として行いました。

市側も協議会の審議を受けて、「効率的効果的な図書館サービスのアクションプラン」による見直しの基本方針を修正しました。特に市の当初方針であった運行台数削減ではなく、中・小型車への買い替えとはなりますが、台数維持の方向に修正されたことは審議の成果かと思えます。また定期巡回場所の見直し検討の際には、貸出数だけを判断基準とせず、総合的に判断し、市民との対話の機会を持つという方針も示されました。

このような図書館サービスだけではなく、教育プラン策定における図書館関係の施策作り、指定管理者制度導入問題、図書館を図書館ではなく図書コミュニティにするというような決定など、図書館行政にかかわる大きな問題は、本来図書館協議会に諮問されるべきテーマですが、現在の町田市では諮問対象となっていないのが残念です。

また、今期で私の協議会委員の任期が終了しますが、図書館からは次期委員を町田の図書館活動をすすめる会から推薦を求めないとの連絡がありました。市民の声を図書館にと図書館協議会発足を議会に請願し、1985年に協議会ができてからも図書館がより良くなることを願って、当会選出委員が継続して参加してきたので、この決定は大変残念です。今後、再び当会からも委員が出て、市民に開かれた協議会になることを願っております。

鈴木 真佐世

(町田の図書館活動をすすめる会会員、
町田市立図書館協議会副委員長)

—— 編集後記 ——

『知恵の樹』のNo.276の編集を担当しました高橋と申します。これまで月刊誌だった本誌は、今号より季刊誌として生まれ変わりました。同時に誌面を一部刷新して、読者層の拡大を目指しました。まず、誌名『知恵の樹』が示す通り、町田の図書館活動をすすめる会の広報誌として、町田市を中心とした読書好きの方たちが、読後に「なるほど」「役に立つ」と思える発見や知恵があふれる誌面にしたいということ。そして、あまり知られていない図書館情報を紹介するだけでなく、本誌が市民団体の発行する図書館関連誌である以上、町田市の図書館行政に対する辛口の提言も掲載すること。この2点を基本的な編集方針としました。また、本誌を含め、町田の図書館活動をすすめる会の情報をスマホでも見られるように、QRコードを載せました。当会HPのトップページにリンクしています。こちらのQRコードをスキャンすれば、バックナンバーもお手元でお読みいただけます。皆様から図書館情報やご意見を賜れば幸いです。



高橋 門樹 (町田の図書館活動をすすめる会会員)